

## エピソード 16

「たくさん「ほめて」モチベーション UP」  
～新しい自分にチェンジ～

校長 若松 剛志



子供の頃から親に叱られた記憶はほとんどありません。唯一の記憶は、ここには書けないような悪さをして、父親から2時間ほど叱り続けられたことです。(このときは、「8時だよ。全員集合」が見られなかった。)

ほめられたこともあまりないが、ささいなことをほめられるとうれしくてうれしくてたまらなかった。

両親は自営業で、工場は家の近くにあり、朝早くから一生懸命働いていたことを知っていた。昼食を食べると15分ほど昼寝をして、すぐ仕事へ戻っていました。夏休みのお昼は、「出前一丁」がお決まりでした。

例えば、忙しくて納得のいくできではない料理のまま出すこともあります。その時、「何これ?」「あまりおいしくないね。」などと言われると「今日はそんな暇がなかったんです。」と弁明したくなります。ともすると、「自分でつくればいいがね。料理できないくせに。」などと、けんかになることになるかも知れません。

しかし、納得のいくできではない料理にも「今日もおいしいね。ありがとう。」と言われたらどうでしょう。「明日は、もっと頑張ってみよう。」と前向きな気持ちになるはずです。

子供の場合には、なおさらだと思います。

子供の予想どおりにガミガミ叱るより、できていることに着目して「この問題は、よくできたね。」と子供の意表を突いてニッコリほめたりすると、「次はもっと頑張るぞ。」と前向きな気持ちになるかも知れません。

失敗をしたら、次は失敗しない方法を考えようとする意欲を持たせることが大切です。失敗を叱ってばかりでは、主体的意欲が乏しくなり、指示待ちになったり、責任転嫁したりしてしまいます。

もちろん、命に関わる行為や人道的モラルに著しく逸脱した言動に対しては、毅然とした態度で接することが大切です。